

「無監督テスト」を実施。 信頼関係を土台に主体性を育む

富山県 富山市立速星中学校

富山市立速星中学校は、50年以上前から、全国でも珍しい「無監督テスト」を実施している。「信じあう心」を土台にした生徒と教師の信頼関係が、あらゆる活動の基盤となっている。生徒を大人扱いし、努力を評価することで、前向きに学習に取り組む意識を醸成している。

●背景

「信じあう心」を土台に
始まった「無監督テスト」

富山市立速星中学校で定期考査にテスト監督がない「無監督テスト」が始まったのは、1960（昭和35）年のこと。「教師が生徒に信頼されるには、まず教師が生徒を信じなければならぬ」——そう考えた当時の室林弥一校長によって、その前年の職員会議で提案されたが、教職員から不安の声が上がり、その年は実施が見送られた。しかし、室林校長は諦めず、1年間購買部の無人販売を行い、

数回にわたって無監督テストを試行し、不正が行われなかったことを確認した上で、教職員の同意を得て正式に始めた。以来、50数年にわたって、「信じあう心」は同校の教育の根幹として受け継がれている。

2002年度には、傘の貸し出しやノーチャイムデーなどの取り組みが加わった。当初は、生徒と教師が信じ合うことで、居心地の良い学校をつくるのが目的だった。今はそれより一歩進み、人が見ていてもいなくても、自ら正しく判断して行動できる人を育てたいというねらいが、よりクローズアップされるようになったと、清水賢校長は語る。

School Data

◎1947（昭和22）年開校。「正大 明朗 誠実」を校訓に、「信じあう心」と「志をもち、よりよく生きる生徒が育つ学校」を目指す。50年以上にわたり無人販売、無監督テストを実施し「信じあう学校」づくりに努めている。



校長◎清水 賢先生

生徒数◎ 884人 学級数◎ 26学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒939-2721 富山県富山市婦中町板倉 345-1

TEL◎ 076-466-2125

URL◎ <http://swa.toyama-city-ed.jp/hayahoshi-j>

公開研究会◎ 未定

「誰も見ていないところで正しい行いをするには心を磨くことが必要であり、それが生徒の自主自律につながると考えています」生徒自身が主体的に考え行動できるように、なってほしいという教師の願いが、「信じあう心」に込められている。

●無監督テストの意味

学校生活を通して築かれていく
生徒と教師の信頼関係

他校から異動してきた教師にとっても無監督テストは驚きである。13年度に赴任した1学年担任の窪喜妙子先生は、同校で初めての

1人で学べる生徒を育てる



写真 試験中は、教科担任が各教室を巡回し、出題内容に間違いがないかどうかを確認するのみ。それ以外に教師が試験中の様子を見回すことはない

定期考査をこう振り返る。

「問題用紙を配って教室を出ても、なかなか立ち去ることが出来ませんでした。テストは監督しなければならぬという意識にとらわれていることに改めて気付かされました」

「信じあう心」の実践は、教師にも大きな意識の転換を迫るのである。もちろん、さまざまな生徒がいる以上、常にうまくいくわけではない。清水校長はこう話す。

「かつて担任として本校に勤めていた時には、生徒のカンニングが発覚し、テストをやり直したことがあります。現在もさまざまな噂を聞いて不安を感じ、テスト監督を付けてほしいという保護者がいます。しかし、『信じあう心』は本校の伝統であり、その精神を伝えることが我々の使命だと思います」
ここ数年は大きな問題となった不正はない

が、あった場合は、全校集会で呼び掛けたり校内放送で伝えたりして、生徒に極力事実を公表する。特定の生徒を罰することはない。その中で、校長や学年主任、クラス担任が改めて無監督テストの意義や信頼関係の大切さを説き、二度と不正が起こらないように呼び掛ける。3学年担任の高田秀二先生はこう話す。

「3年生になり高校入試対策が始まると、一部のテストで監督が付きますが、生徒から『なぜ今頃になって、監督をするのですか』という声が上がります。『最後まで自分たちに任せてほしい』という生徒の真摯な気持ちを感じます」

テスト中の様子は、テスト後、生徒にアンケートを取って確認する。「問題に間違いがあると困るので、巡回を早くしてほしい」といった内容がある程度で、このアンケートもなくてよいという生徒の声も多い。

「伝統を守りたい」 その思いが自分を律する

生徒はこの制度をどう受け止めているのか。1年生の岡田奈々さんは次のように話す。「入学して最初のテストの時は、誰かがカンニングをするのではないかと思って心配でした。でも、テストが始まると、教室は静かで緊張感があって、思った以上に問題に集中できました。今は、宿泊学習などのさまざまな行事を経験してクラスの絆を深めてきたの



富山市立遠星中学校校長
清水賢 しずか・まさる
「心を磨いて自主自律が出来る生徒を育てたい」



富山市立遠星中学校
高田秀二 たかた・しゅうじ
3学年担任。国語科担当。「生徒たちに必要な学習内容を精選し、分かりやすく提示したい」



富山市立遠星中学校
高田孝二 たかた・たけし
3学年担任。国語科担当。「生徒たちに必要な学習内容を精選し、分かりやすく提示したい」



富山市立遠星中学校
窪喜妙子 くぼき・たえこ
1学年担任。国語科担当。「生徒の努力をきちんと評価して、意欲を継続できるように心掛けている」

で、テスト中に不正をする人はいないと思えるようになりました」

3年生の池田瑛里奈さんが感じているのは「伝統の重み」だ。

「学校の歴史を知る集会で、先生方の反対意見もある中で無監督テストが始まったこと、『信じあう心』に込められた先生方の思いを知り、自分たちも先輩たちが受け継いできた伝統を守らなければならないと思いました。3年生になると、先生がいなくて当たり前になるので、誰かがカンニングするような雰囲気は全くありません。周りが静かなので、

自分もしっかりしなければならぬという気持ちで芽生えてくるのだと思います」

学校の伝統を守りたいという思いが、生徒に良い意味での緊張感をもたらし、自身を律しなければならぬと感じさせるようだ。

「入学当初から信頼関係があるわけではありません。無監督テストや日々の授業、行事などを通して、学校の歴史を学び、クラスメイトとの団結を強めていく中で、信じ合う心が芽生え、自分たちを律していこうという気持ちが出てくるのだと思います」(高田先生)

●家庭学習指導の工夫

目標への道筋を示し 達成に向けた意欲を喚起

「信じあう心」を教育の基盤に据える同校だが、「生徒を信じて任せることと放任は違う」と教務主任の福村寿太郎先生は強調する。

「生徒の学力はさまざまです。自分で課題を見付けて取り組む生徒がいる一方で、学習の仕方を分かっていない生徒もいます。将来の夢を実現するために何が必要か、希望する高校へ進むためには何をしなければならぬかということ、教師がしっかり道筋を示してあげなければなりません。きちんと学習の見通しを持たせることで、生徒と教師の信頼関係は更に強くなっていくのです」

自律的な学習を促す場合も、まずは家庭学習の方法や時間の目安などを教える。

同校は13年度のアクションプランの1つに、家庭学習時間の増加を掲げている。

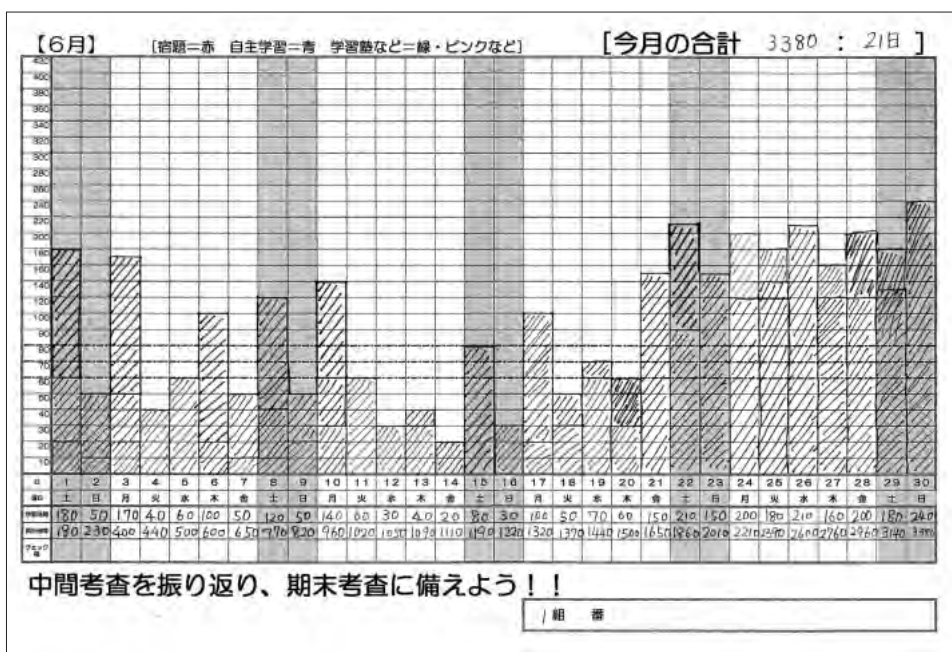
家庭学習時間の目安を「50分+学年×10分」(1年生60分、2年生70分、3年生80分)としているが、前年度、それを実行できた生徒の割合は50・6%と全体の半数にとどまっていた。また、「学校で学習に意欲的に取り組んでいる」生徒は多いものの、家庭学習に対する意識は高くはなかった。そこで、毎日「学習記録」(図)に前日に学習した内容と時間を記入し、クラスごとに集計し、毎月、達成状況を確認し、学校内外に公表している。

「『他クラスも頑張っている』『友だちは自分よりも学習時間が多い』などと気づき、自分も頑張らなければならぬと刺激を受けられれば良いと考えています」(福村先生)

学習計画で生徒の変化を見て 個別に声を掛ける

生徒同士が切磋琢磨する気持ちを育もうと、家庭学習の方法を共有する取り組みも行

図 「学習記録」の記入例(1年生)



宿題は赤、自主学習は青、学習塾などは緑などと学習時間を内容によって色分けして塗る。自分がどんな勉強に、どれだけ取り組んだのか、また取り組まなかったのかがひと目で分かり、振り返られる *同校の資料をそのまま掲載

う。例えば、全校集会では、各学年の代表者が、自分がどのように家で学習しているかを発表し、生徒全員に感想を書かせている。「家での学習方法が分からない生徒の参考となるように始めました。発表した生徒の方法がベストというわけではなく、自分の性格や学習スタイルに合ったものを取り入れて、

1人で学べる生徒を育てる

それがうまくいけば続けてみようという気持ちになつてくれればと思つています」(福村先生)

生徒個々の計画力に応じた指導も行う。

「学習内容まできちんと書ける生徒もいれば、計画を立てられない生徒もいます。学習時間と就寝時間は必ず書かせるように指導し、一人ひとりの生活リズムを見ながらアドバイスしています」(窪喜先生)

生徒の生活態度や意識の変化など、生徒の様子をモニタリングする際にも学習計画は有効だと高田先生は話す。

「家庭学習は継続が大事ですので、学習内容よりも学習時間が極端に減った生徒に注意を払います。定期考査後に極端に学習時間が減った生徒には『今が頑張る時だよ』と励ましたり、部活動で疲れている生徒には『大丈夫か』と声を掛けたりします。見守られているという安心感が、意欲を高めるきっかけになることを期待しています」

自分の取り組みが認められ、自己肯定感が学ぶ意欲になる

特に、成績下位層が家庭学習を続けるためには、「やって良かった」という満足感や「自分にも出来た」という達成感を味わわせ、学習意欲につなげることも大切だと捉える。

「多くの生徒が積極的に課題に取り組んでいる教科は、教師の受け止め方が上手なのだ

と思います。例えば、3年生の英語の先生は、授業の最初に生徒の家庭学習の内容を一人ひとり記録し、意欲・関心の評価に反映させています。生徒は自分の取り組みが認められたと感じ、その積み重ねで教師との信頼関係が深まっていくのだと思います」(高田先生)

国語や英語では、予習に課した語句の意味を授業中に質問し、きちんと予習に取り組んできた生徒が手を挙げられるようにしている。やってきたことが確実に評価される、きちんと取り組みが何か成果につながっていくことが明確な教科ほど、生徒は主体的に学習に向かつていくという。

また、教科によっては、定期考査前の放課後に個別指導を行う質問教室を開いている。「学力に不安のある生徒に声を掛け、放課後に集めて、質問に答える形で指導をしています。先生が見守っている、少人数で学習を見てもらえると分かれば、生徒は安心して学習に向かえます。そうして、自分にも出来たという達成感を味わい、次の意欲に結び付くことを期待しています」(窪喜先生)

●成果と課題

中間層の意欲を高めることが課題

1年生から積み上げてきた「信じあう心」の精神が、皆で高め合おうとする意識をつくり上げている。例えば、グループ学習の際、

メモを読み上げる、発表の際には板書をするなど、全員に役割を分担してもらい、参加を促すようにする。各グループのリーダーと教師が連携しながら、頑張っている姿を皆に見せられるように配慮している。

「3年生になると、生徒たちは学習が苦手な生徒の発言も取り入れながらグループ学習を進めるようになります。授業に皆が参加しているのは、そうした生徒の温かい思いやりを支えられているからだと思います」(高田先生)

今後の課題は、成績中位層の意欲の引き上げにあると、高田先生は話す。

「集団に埋もれてしまいがちな中間層の生徒ほど、何か変わるきっかけを求めていると思います。彼らが一皮むけて大きく成長するためには、教師が全てお膳立てをするのではなく、自分で食らいついて壁を乗り越える経験が必要でしょう。そうした意欲を高めるための指導の工夫が必要だと感じています」

清水校長は学校の組織力の向上を指摘する。「部活動を終えて帰宅すれば、家庭学習から逃れたいという気持ちになりますから、スマートフォンステップで達成感を味わえるような工夫を、家庭学習にもする必要があると思います。しかし、その土台にある『信じあう心』を育てる教育を、学校全体が組織的・計画的に取り組むことが、1人で学べる生徒を育てるために必要だと考えます」(清水校長)